

アーバンデータチャレンジ 2014 松江企画案

20141203

島根大学 野田哲夫

■アーバンデータチャレンジについて

自治体が保有する様々な地理空間情報等がサステナブルな形で広くデータを流通・公開されることや、ビジネスレベルで多くの民間企業等が参画するという状況を達成するための活動です。

2013 年度に「アーバンデータチャレンジ東京 2013 (UDCT2013)」という地域課題の解決に向けたデータ活用コンテストを開催し、延べ 500 人参加の下で自治体等からご提供頂いたデータ（オープンデータ含む）を用いて、アイデア・データ・アプリケーション計 75 作品が集まりました。

このような状況を受けて本年度 2014 年は、本活動を東京・首都圏に限らない日本全国に広げる活動を展開することとしました。国内 10 拠点の皆さんと連携して、各地でワークショップやまち歩きなどを行いながら、チャレンジに向けた土壌を育てています。（社会基本情報流通推進協議会 HP http://aigid.jp/?page_id=421 より）

■アーバンデータチャレンジへの松江市の課題とチャレンジ

島根県松江市では 2013 年度に松江市・島根大学・地元 IT 企業の産官学の連携でオープンデータを活用した“ソーシャルネットワークマップシステム”を松江発のプログラミング Ruby で構築し、そのモデルの実証を行った。具体的には、観光情報、歴史・文化情報等を政府オープンデータ情報基盤に従って地図上（国土地理院万 5 千分の 1 の日本地形図、Google Map、OpenStreetMap）に表示するプロトタイプを構築した。

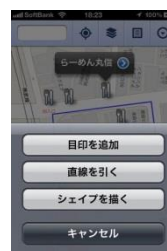
また、オープンデータとその活用による地域振興に関する理解を進めるためのアイデアソン（松江オープンデータアイデアソン、2013 年 11 月）を開催し、地域の中で人々が日頃から抱える課題（安心安全、交通、地域医療、観光など）の課題解決に、行政や自治体が持つ様々なデータをどのように活用すれば解決することができるのかについて、地域の人々や自治体職員、研究者などが一緒になってアイデアを出し合った。

今後はこれらの地域課題の解決に必要なデータを産官学が協力して抽出し、“ソーシャルネットワークマップシステム”も活用しながらオープンデータ化すると同時に、行政・学生・市民とエンジニアの協働によってオープンデータを活用した地域課題解決型アプリケーションを開発することが課題である。そこで、この取組につながる「Ruby でまち歩きからアプリ開発へ」イベントを行う。

■ 「Ruby でまち歩きからアプリ開発へ」 イベントの概要

① マッピングアプリの活用

松江市内のデータをマッピングできるアプリを活用する（基本的には島根大学の「Ruby プログラミング講座」を受講した学生がプログラミング言語 Ruby で開発中のマッピングアプリを想定）。



松江ソーシャルネットマップの利用 or マッピングアプリの開発 or 既存アプリの活用

② 行政機関等からデータを収集とマッピング

松江市等行政機関から収集したデータ（AED、無線 LAN アクセスポイント等を想定）を①のマッピングアプリを活用してマッピングを行う。

③ まち歩きによるデータの収集とマッピング

まち歩きイベントを行い、学生・市民がデータ（AED、無線 LAN アクセスポイント等を想定）を探索・収集し、①のマッピングアプリを活用してマッピングを行う。



☆島根大学内で「まち歩きイベント」実施

12月16日（火）午後2時30分～午後6時

☆松江市内で「まち歩きイベント実施」

12月23日（火・祝日）午前10時～午後7時

午前10時までに松江オープンソラボ集合

学生の他、市民公募

④ 収集・登録データを「松江ソーシャルネットマップ」を利用して RDF データ化した上で、アプリ開発につなげる。

